



3回目となるワークショップでは、イノベーション人材創出について、世界では新たな産学連携モデルが台頭してきていることに着目し、「最もイノベティブな大学の世界ランキング」において、米国以外でトップ10に唯一ランキングされた韓国の実態を聞きつつ、日韓の比較からそれぞれの人材育成の課題について考えることにした。

最初に、韓国漢陽大学 ERICA キャンパスにおける教育改革に関して、漢陽大学教授であり、韓国産学協力学会の名誉会長である Woo-Seung Kim 教授が基調講演を行った。次に、日本における産学連携産業人材教育に関して、静岡大学理事であり、産学連携学会副会長である木村雅和教授が基調講演を行った。

これらの基調講演を受けて、後半では基調講演者2名に加え、韓国産学協力学会の会長である Seung Lee 教授、そして日韓比較研究に詳しい兵庫大学の李良姫教授、兵庫県立大学の李素婷助教をパネリストにパネルディスカッションを行った。パネルディスカッションでは、産学連携による PBL (Problem Based Learning) 教育に対する意識やカリキュラムの違いが指摘され、それぞれに学ぶべき事項について議論が交わされた。

---

コーディネータ

座長 伊藤慎一／秋田大学

6月15日(木)第1日目 A会場(11:45~12:30)

本セッションでは、産学連携を推進する上で重要な役割を担う、コーディネータの活動の育成と実践という観点から3件の発表があった。伊藤正実（群馬大学）は、群馬大学、宇都宮大学、茨城大学で構成され、その教育を広く他大学まで拡充して行っている“多能工型”研究支援人材育成コンソーシアムの活動を通して、これまでに判明したコーディネータの職能獲得について報告した。特に、コーディネータの業績評価と調整能力をプロットした結果、これらについては、一定の相関が得られる傾向が見られたことから、今後コーディネータのスキルを客観的に判断する指標の一つとして活用することの可能性を示した。大石博海（長崎大学）は、医療現場ニーズをものづくり企業につなぐ一連の手法について、実務的なアプローチから具現化するためのプロセスの獲得について報告した。特に、公開情報による研究概要を提供し、その内容について企業とマッチングを図り、競争的資金の獲得につなぐプロセスの重要性と自らの取り組みについて、課題解決型の医工連携と先進事業につなぐプロジェクト型医工連携の2つの必要性を示した。野口卓朗

(有明高専)らは、若手の産学連携コーディネータの育成の重要性について報告した。特に、共同研究と街中の活性化の観点から、大牟田市まちづくり基金事業を活用し、まちなかシリコンバレー設立準備会の設置や、共同研究オリエンテッドによるアカデミア発ベンチャー株式会社 ASK を誘致するなどして、人工知能活用技術者の育成を行うことを目指している。

これらのコーディネータの育成および活用スキームは、我が国の産学連携の深化に伴い、重要な取り組みとしてもっと議論されるべきテーマである。3名の報告者の取り組みがますます向上されることを期待する。

---

以上